報仇

絵本高尾外傳

二

へ13
3018
3

へ 13
流 3018
巻 3

泉岸　思之中村貞幹
同　傳愛奥田頼聞正

頭書類語 小學作文教授書　全五冊

此書ハ先生曾テ学校巡回ノ際各校生徒ノ進歩惟リ作文ノミ諸科ニ後ルヽヲ憂ヘ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其発明スル所ヲ實地ニ試ミ其效アル俗文要語活用問答今正誤文俗文復訳法等各若干ヲ初巻ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教授方ヲ説キ日用短簡文一百餘章ヲ編ス○次巻ハ首ニ俗語類聚ヲ掲ゲ次ニ四季贈答文祝賀悔吊文尺牘信文公用頒布文諸証文等ヲ編ス○第三巻首ニ方今流行ノ雅文ニ俗語ヲ補ヒ僅ニ三十版毛名字内外ヲ以テ文ヲ成ス至テ短キ未曾有ノ極面白キ尺牘百餘章ヲ編ス○第四第五ノ両巻ハ首ニ漢文要字助字虚字解ニ用例漢書及古国史ヲ示シ次ニ記紀事論説賛銘題跋傳序祝文吊文祭文等ノ作例数百ヲ編シ其文ノ種類ニ従フ其趣意ノ作方ヲ説キ他人ノ文ヲ訓解ヲ施シ教授且ツ独学ニ但毎巻ニ作例及ビ類語ニ假名ヲ以テ訓ヲ施スル語数千ヲ掲ク○ニ便スル書ナリ其親ヲ一覧実試以テ其言ノ訓ヒガルヲ知リ玉ヘ

筆紙ニ盡シ難シ四方君子

大阪北久宝寺町四丁目
前川源七郎敬白

昭和九年七月十二日 購入

第七回

江戸　楚満人著

信濃かゝる伏屋ふせる幕木のありとも見へおろかる。

陸奥にかゝる男の姿なりしや父の亡魂の行の音により来るひとり親子二世と成るまと年月を経し親をうどとの浪にうすべきこと高尾は女をとらうりうる浪子の外面ばかりなれど名彼立流の鉢風武士とこがくきる

さうるる。衣紋つくろひずつと入るる蔵次郎ぶ侍ちうく。

威儀を正シ「イヤ平尓ゑるら拙者ことい江城外の

者てせ人主人いとつゝ吹物の乃ゝ執んあゝ。ひこゝに
妙を技る人あゝべ。めしゝゝんと。年比ふびねゝと
ゝゝれどいまゝごゝをゝゝゝゝ感能の者もるゝゝし
に。不図只今貴殿のゝゝゝゝ音ゝ。おもいぞもて
ゝで来ゝ。藻子へこてくきゝつゝるに。ゝすゝくゝ音
耳とすゝ。飯ゝとゝゝゝゝありゝね失礼ゝゝ年
ごめんゝごゝゝゝべし。年ゝあゝぶりゝゝゝき変ゝ
ら。浪人とゝゝけゝゝるゝ。拙者ゝゝ人へ仕官志ゝゝ。
吹拳ゝすゝ。半蔵のゝゝ中ゝけ。変ゝゝゝと。ゝ人と
ゝのゝゝ子代国ゝゝ。ゝ年ゝゝゝ拙者ハす

るゝゝゝゝの列ゝゝゝる梅田左近ゝ望ゝゝ私宅ゝで
ゝゝ入来ゝと問ゝ茂次郎ゝゝ。礼をゝ。茂「こゝ
ゝ。冥加ゝゝゝゝ拙者変ハ氏と戸田とゝゝゝ名を茂次
郎とゝゝゝゝゝゝゝゝ祖ゝゝ伶箇の家ゝゝゝゝ
ゝゝんづゝ箇のゝゝゝゝゝ其温奥をきゝゝゝこと。さ
ゝ。ゝゝ箇ゝ我ゝゝゝゝ代ゝ伝ゝる名箇ゝゝゝゝ。その音も一
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぐーと謹ぐのべけるに。左近はきらくうち点頭をして。
さる其りのゆうす何ゝ涼き堅のある仁ゝらんうけゆゝと。
察するところ俱不哉天の族あわあうぐるぐるさゆうの変ふ
もあうば一旦殿へ出目見えーう。従の出はゆくるさまーー上よ
ぐ改て佐市の郎ひと立ちと出立あ人あも弥ゝ備足るお
ぼしめさるべと。余後るに刻ふ茂次郎も今ふ出くむふ及ぶ沢よん
と変ー茂一斯出又出にあづる上い何をる色ゆべき。拙者が兄同
苗茂太郎とやす者先年ここ移へ湯治ふまりーーりり
かゝ山中ふあぬゝ何りのもあとば。やゝうちにあいる
ーとのことぞとすゝ拙者が兄あうぎみつきゝ。国

遠いとーーる浜の支るまば。ありまぞといへせうともな
く。さまとも普く諸国をめぐりさぐねさぐ。虎と見
く石又立矢のまいのどとく。いゝか本意をとげざるべき
と思へ心の一筋に諸国をめぐる氏年月弓矢神ともこ
えあまま運命いたーーる今ありく。その名ぐりたいぐ
まどもとてふ不審ハさるるる早渡峠の谷間まこる
おひの女に出会ーーがとれ兄嫁お花といりのえ之の子
細よく向坂甚内とや浪人の「あたら色」の死骸のまな
ー。悪人ゆうら嫂ゆまぶ其甚内とまーぶねびーー。敵と
ろまくいさせんと。思へば敵の二人まで重る恨ゝの数ふ

濱の真砂子のごとくも尽じさう
なるに不肖のこと云ふ〻くまでに熊
夫しまの屋敷の家情とまさ
すてぐさしいふも作のあるべし一旦
屋敷の門口入る四めみ人なし其
上あるく〻あるくさあるく内殿をとの
けく仇お覓の門竟をうけ。
する迷うべし正面と左近も大
きふよろこび　を〻べ明日拙
者宅まで来らるべ。そのとき覓

く相語りさん爰い拉所の支ゐ且
ば。まづ〻とのまくあるる且中すと
ずんと云ば浅次郎ぐ國の外まで
あるるつて。左程とさらば明日と
互ふ武士のかりゐ高奈ふ似氣ゐ
紀麻呂。余仏をえでうる云のび
ぐま。誰ぐまづまでこう風深の唱等
にまぐまくるる且さるとゐ新く浅
次郎ハ其夜ハ高尾ぐ許ふ云ま
り。彼夜みゐ余越方の物ぐこ

あくまで長坂をあがるなり。早速ふく代田の郎とたづね梅田
左近方宅へいたり其姓名を報じ。對面をたのに取次の
侍まうでぬ「左近義ハ只今奚へあがりまして留守
にてござるゞ」と一ト間へ招じけるが。茂次郎ハ烟草
をのみまうしうちに只今左近帰宅せり。かつて見ス
まいり四月ハうるべし。又ハ取次立出て最叮嚀ハ濃
ろにぞ。茂次郎ハ委細うけたまわりて麻まうしうちに。
紙門をあけうちわしひらけ立いでる人を見るにたゝ奈何
ハ。昨夕うるはしく命じ。左近ハ似もやらず年齢五十ば
かりの老人ゆく樽のあるたまを手をさしれ。つく茂次郎ハ

ひろひ「戸田茂次郎ぶのさい半殿の門のあや。拙者ハ
ち梅田左近何ぞ用ありて来りしとー。とくとくく茂次郎不審
ゝ乎茂「梅田左近と名いるがごとの主い昨夕面會
ゝるる人とハ雲泥万里のあ違なるハ何ゝも以ての外
しの一ハ家中に同姓の侍ありやと問うべし。同じ左
ゝも不審顔左「イヤ當家中ハ梅田と申苗字とするハ者
拙者ゝ外ゝるのー。スリヤ度にハ昨夜その梅田左近ト
いへ者ハ面會いたさるとー。とうその面會さるとー所いづく
年恰好面体衣服いかゞやとどうらるく茂次郎茂ハサア
その遇ー所ハ吉原三浦屋と申青楼の楼上ハ。年の頃

まゝ三十三四色まろく眉秀目の中涼しく鼻高くけだかぶる半人のお良なりトいへども主左近樣まと云て左へそなたとうとびあひあさとる支そなたは何いまろれ且なる用あり〳〵に入来トきゝもとも茂次郎ハアヤうの一五一十とりのゞこと也ば左近いよ〳〵落付く左「貴殿の仰せ迄るゝ梅田左近とやハするいち四ま人子代田殿のことるゝ〳〵主人兼く吹物の業とこの。其道ゝ達しゝる人をめ〳〵いんとまゝ〳〵支年えゝさゝ也ば必定ゝ者さるべゝ也ど。拙者ハ実名とつゝ。梅田左近と家嫡の名とるのゝ〳〵ゝ〳〵のうゝん。皆らくこゝにまゝ

ゆゝとひろゝゝ又要へいり潮ゝ出帰り「拙者ゞ推量のゝゝゞゞく夜三浦屋とやらん也面會さゝ也ゝゝ白人ゝ相遠ゞ今も今ゝ元者屋のまるゝらゝゝ。球の外銀望のゝゝ子ゝゝ同道ゝて四目見るゝゝとゝゝ。茂次郎もゝゝ疑念もゝゝ也ゝゝ。ゝゝゝ支ゝゝゝゝゝ去る祝ゝ茂次郎ハ実の梅田左近ゝ取持ゝゝゝ子代田殿に四目ゝゝ。食潮三百石ゝゝ。まゝハ近ゝの並にめゝゝゝゝ一家中へ吹物の指範仰付らゝゝゝ。茂次郎ハ面目をゝゝゝゝゝゝこびゝゝゝゝ又一ツ復讐のこゝゝゝに折を見ゝゝゝ也帳のゝゝゝ頼ひいでゝゝゝ子代田殿ゝ也機嫌ゝゝゝゝ。早速ゝゝゝゝゝゝ四差神の一腰ゝ。路

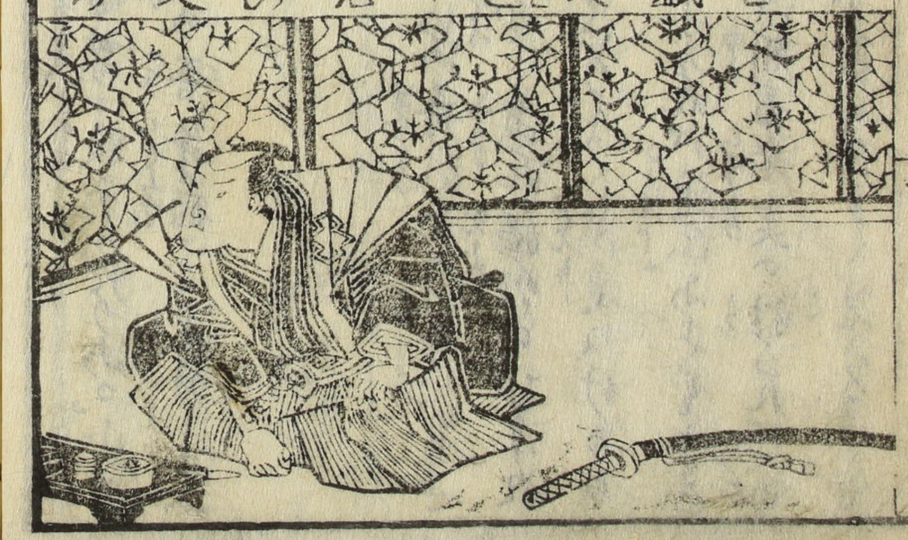
金おもてをたくさんかつり本望とげて後あとに立飯り勤仕すべしと残るうたる紙前の首尾又いよ〳〵面目をかとこし言とかしこ出立せんと。高尾が方へも眼こひよりあた。一夜とぶまりうを行すへの支ゑどいひのこり。又りや旅路よおもむき。抑もこのくぐりのことをつくらうよまるさでやと思ひて。草稿みれいつられ其とどこをこのこゝろおもをまくぐ世ふあるふとこる復讐のをゝしりのぐゝりあるを雑劇ふちとふりて。前の楚満人が ふでをつくし〳〵たべをゝつくすことをあぐくこれををゝめぐをゝゝきかんじんかるめの。只その

大旨をのこゝろのあらしをゝも毎篇丁数ふゝぐりある小冊なるバ看官ゑゑ綴編をを例の吾癖をこんをゝのゝ支をゝん。

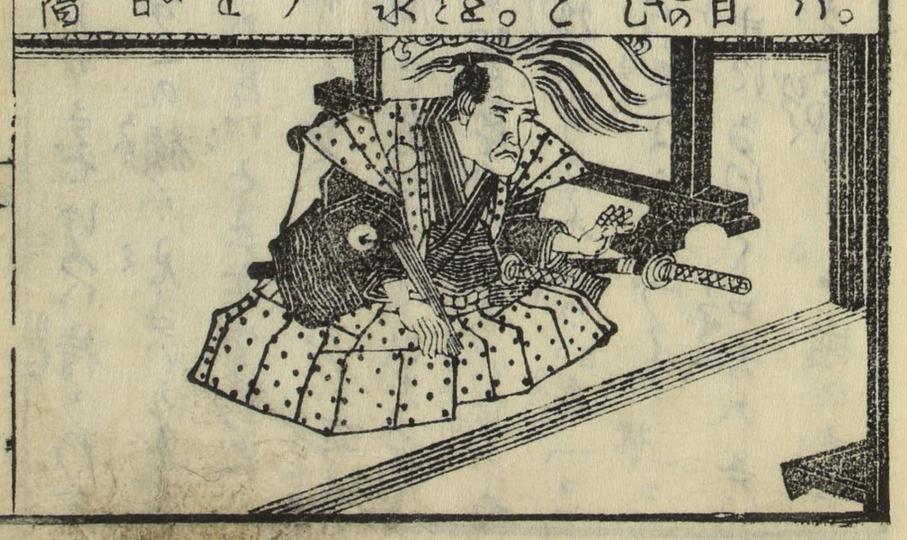
第八回

愛江又宮戸川の辺よ揖藏といふ舟乞あり年ハ廿ぐ廿二三ふして家業に怠あるく和泉のむまれよして男振もよく物毎まををうよく萬支ゐけあるく。殊ゑ一個の母に孝行をつくしをれバ近ふあくもゝを賞れまね者もありける去まバ斯る老夫の性をれバ常にわど通きをろなぐら廓なんどくいさをく見をるを

とくもかろうちが或日観世音の中
店なる錦絵をひさく家のまへと
しるしり不図くるくるとかたるに戯場戯
子吉原の遊女の姿絵をかくうぐ
しるかるに一個の美人の姿を画
を見るに。いろゐる寂世のあるを見
ばや。揖藏ハどうとするまで見
ると。とかそもいづくいろうる人の
俤像ばや毛延寿が筆ゆゑよろうる人
うふかあしぬうと思のまでのうろ



くるくるとよくくとを見まば。
ばてとを　三浦屋内　三代目
高尾とあるゝありるを。さそくこの
頃噂に聞く三代めの高尾と
中らんが及すぐとあてありるうと。
ちみうめくちいつを迷彼絵を買求
めるこゝ。母にうくして二階の戸
棚の内へ張りおき折くあるを
見て賛をまらくるるが。ある日
後へ人をうるをうぐし獨り二階



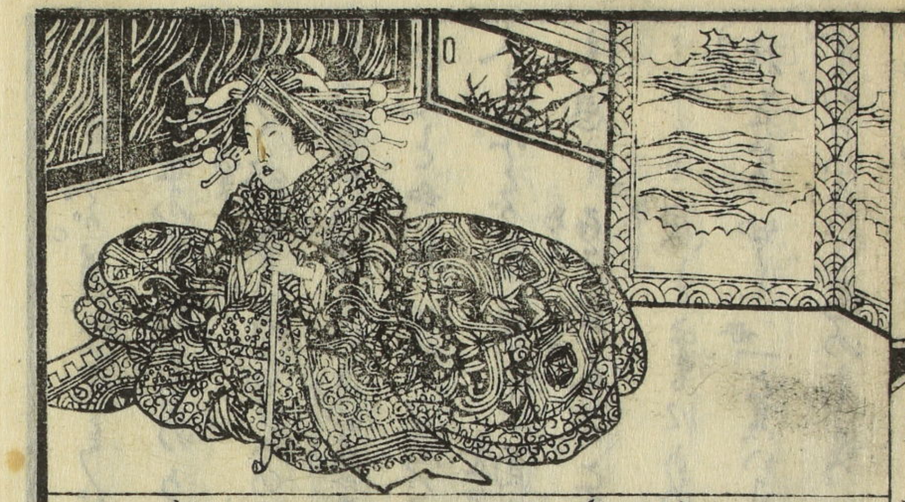
へあがり戸棚をあけ　揖「マ高尾どの　さぞけつハ待うれと
であつへのかを　も早くあるとの顔ゞ見てこいとど
何をいつても家業といふものあるバ　そをとをあまうねバ
ならをぬ大きふ遅ゝみて。ずゝこちくとるゝや。ハて返る
あやらぬハ。ずゝく来ることを腹立るのゝコレひぞろも
大ゝのやどのあゝさりの。早のこちをひきやのトハ人に知いの
どくゝる。口舌もゝんのゝ心ゝ。後ふうゝハ　母お舟「コレ
揖藏やトよびうくをどこるゝこい更ゝこゝろづゝず　揖「コレ
ちやゝと返るゝをあやらぬゝト。夢中にゝゝく口舌のさい
ちう　母「コレ揖藏ト脊中ゝゝうをを胸ゝゝ。戸棚の戸と

さゝ　揖「ハイゝゝ　ゝまゝいハ母者人けてまゝゝうゝゝゝゝゝゝゝゝ
りまゝゝゝ。何の用ゝどゝろゝます　母「こゝ人ハ何の用
ぶけてまゝゝうまゝのゝさいぜんゝら揖藏ゝくとゝいゝど。
そゝゝゝ何やら戸棚の中へ首をいをゝ。ヤレ遅ゝゝゝゝゝ
をゝゝとのゝゝゝんぞといやゝゝゝ。ありやゝゝゝ何のゝゝゝ
でやト聞をゝく揖藏「サアあゝゝゝゝでゝどゝゝまゝ。ヲヽコレ
くゝゝゝゝの間ゝゝゝ居眠をいゝまゝゝゝゝゝの夢でど
ざゝまゝす。ハテ夢といのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
どゝゝまゝゝゝゝゝと顔でいのを母ハ見るゝゝ目にゝゝ
ゝゝゝゝゝのごゝ　母「イヤゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いのちのハこゝろもちのあの徒の唐土の盧生とやらハ邯鄲とやらいふ所で粟の飯の出来る間ゝ五十年の栄花の夢をゆめさめたる支そうさもいまゞ世二三の放蕩盛り狂ふとの紅灯といふ。ものハ吉原深川をわろく擬呼び肝心そなたなてア此年ゝ夜明り日どもろ　ちゝとも　ちのいちと　ゆゝしのそるゝ。此ゝいどゝ母ら切ゝ切ゝしい顔つきゝどゝのゝ支じゃやゝと思ゝ　ゝ　ハ今の　ちゝ　後ゞ　ゝ　ゝと　子を見ゝ　ゝ　ゝ　

しぶ。その時のうらまぢをうつて并ぶ。私が実の祝の記念ぐ。どぞりまつ。むとまぢをけいたるまぢねど。大変さうけうとあつしやまと割竿肌身をみさず持く居まつ。夕の時のうらまぢれう。うつて浜のの方のうちに鈔のうちに遣りしい。ある人の物好と。今にもつく居まつまどぢいの変ちうちのもけもあまず。ねくうくそうにも何国の人ちゆ家もちつねば名もちつず。今後今日が日まで捨ておぢまつと。そまいそふと彩のあるに見つりまつと上ついとしいともどぞりまぢねるねど中店で見まつと高尾ち姿絵

しぶ。と惚とんで小男の角の女が又と世ふもあるのうと。思ひにつけて衣つの間もまするく眺めくせめくの心母の絵を実のくうり戸胡のうちく張くかさのあるわい絵ひつくく口舌のこんとんとちらいのそ見るのが元の樂しくちうの変を母人ふ見ぐちらまて面目わうく楽う。馬鹿とも何房とも思しくたまんが。こまもるまの周果と母でおぐうましくと涙とまにのぐまび母い吹く情うう。圓金五枚をもう知しく母「まいちしくが死金どのようとぐあつもつくまと思わくちくあのと大切の金なら。そのようふま



で高尾どのゝ妻を思ひそ
めと倘や恋病とやらでもおとろてハ
なるぬ初に五両の金を持く行
く其状をかくるゝ〜ゆゑなら情を
あきるハ妻る高尾どの。よりや否
とハいろ〜やるきい一夜を百夜と
もやゝて今ゝ妻を。そなゝも原ハは
ある人の徒でもあるまじ。ま〜
ゞようゝものに拾ハ〜ゞ。そなゝと
ゞその身の業とあきらめく。うんゝん

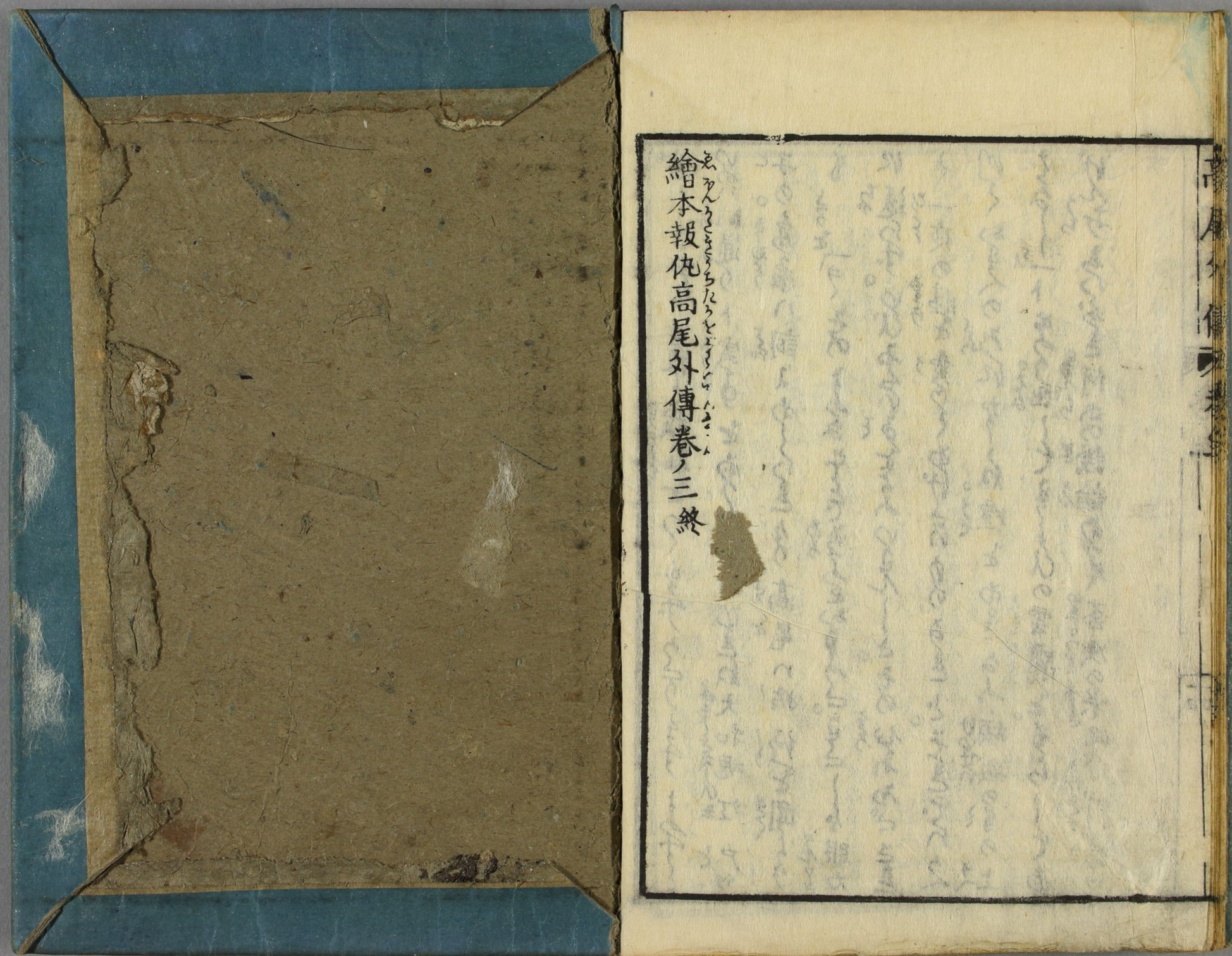
しとだろうけく。あとハ泪ゝむせ
久ゝバ。揖藏何のゆゝ。えゝ
ゝ外の夏ぞゝ。斯く船に揖
藏ハ。ゝゝ妻ゝと借着して茶屋
ゝほのゝ。ゝん〜ゝく高尾ゞ客とな
ゝく廿度ゝ〜ゝ妻ゝ床
屏風のゝ〜ゝ只獨燭ゝ〜〜
ゝゝ〜ゝに出ゝて高尾ハいと妻ゞ
にあゝ妻ゝ屏風をあけ　一生
ゝゝ〜ゝゝ〜ゝ世ゝ〜ゝ。トいゝ

揖藏。どうつく胸をさすりつゝ揖「エヽ年ゝ久しくどうして
めつゝに住むこゝハありや世ぬ風でも吹ら天氣でもよろい
時ハ年ゝゝとおもハるゝとも年ゝまるゝとハなり世ぬ
ゝを「ヱヤ〳〵そりゃ何をいまゝ喜んす。まづ藤兵せうと
いの支いの。そして多くのうちハ何所ぞ揖「こゝらが
うちハ遠に山宮戸川の　そゝでハ近ゝ久揖「イヤ〳〵遠
の田舎の宮戸川原ゝいの事ゝ「そして何の商賣をするさ
ま生業ぞ揖「ヱゝよくいろ〳〵る支をさゝみさるみさゝ
ぶ高麗ハ新吉原。イヤ〳〵せんどゝを多くうの回船問屋と云
ものサゝ「そして名ハ何と人揖「サア名い〳〵揖藏でハ

ものの揖右ヱ門ゝ。トヤだらヤ何のてんぐゝ高尾いゝ
不審顔て「どうもそうだとゝ思の紙くゝ人柄
ありうゝら怪しゝと思のゝさまで。さすがゝうちつけゝそ
ゝともいとまずゝ「聞ばあとまたそろいね今の詞何
でもあまゝが今夜来るさん者さまハ深のゝまずあるで
あろゝ。サアまゝ座にハ夢ゝんせ。そのるゝ若衆をよんで詮
義さやるゝ揖「サアゝ〳〵ト身結の紙揖藏
ハせんうさゝ揖高尾どのまゝてゝるゝ吹て下さゝま
すゝ。ぶゝやらゝにまゝりゝ氣をすると客とゝゝゝ入ゝを
ゝんで。深いゝゝの中ゝりうゝゝでもするゝゝゝ思ハゝ

やらのがみぎんもちろちさこけどくハるの。只こゝ迄にぞろと
んゆ見てこ。此揖藏何をうく〳〵まーやうゝ〳〵ハ実ハ船頭
揖柄ちうく世の中を流れ〳〵ちうの世渡りハ。地獄の上の板
子一枚あぶるの毒其日ぐらしの身負る者いろぞや
親音の中店の達屋ぐ見初て姿ふ迷ハ色痴のいと
りあぐらかくども去らねゞのうの犬ともありてと思ハ一心
母の情お五兩の金あとさたそろいぬ借着でいろあ人まど
客にありすま〳〵産業ハすませどまふくふりり膝ちう我
ちゝず肩へらけるる我の涙茨くそに高尾どのくと
うれまるとに見あ〳〵ハ虎落扛騙とあもるくぶ口

惜〳〵さゆえ見れと我恥をつくまずりうります。よ〳〵すと
いのハ情通りト実ずをあ〳〵ちろびまぬ大和堀江戸ッ
子の家業ハ詞よあ〳〵ハ見ろり高尾ハ始終を聞ちう
も ちを「すくそのちることでるあること。ちこ〳〵ぶ眼力
に遠らず。いひあるをちのいんこ〳〵ちのひわぶさ見
く一夜の情を変りくあげこのあまどそまでいく
ハくあまくのろにな〳〵ね。喧嘩をあきあの傾城の家の上
だる〳〵一トちり咄〳〵ちまゝ〳〵ひの雲霧をちら〳〵てあ
げんまちぶを何ホの議論あるや否次の来に分解と聴け



繪本報仇高尾外傳巻ノ三終